

一枚の紙切れ

今から一年半ほど前の高校入試の時のできごとである。一日目だったか、二日目だったかは、よく覚えていないが、とにかく三科目テストのあった日である。朝からの二科目のテストを終え、体育館で、みんなでお弁当を広げようとした時、私のお弁当箱に一枚の紙切れが、折り畳まれて、セロハンテープで、とめられているのに気づいた。

当然、母からであることは、すぐにわかった。しかし、みんなの前で読むのが、なんとなく恥ずかしかったので、誰にも見つかからないように、慌てて制服のポケットにしまい込んだ。そして、午後のテストの為に再び教室に入ってから、こっそりと、机の下の辺りで広げてみた。

「おつかれさまー！」

お昼からの最後までがんばるんやで……

受験番号は、忘れるなよ。

ちよっとくどかったかな、アハハハ……

では、はりきって、どうぞ。

母さんより」

普段母は、「……やで」とか、「……するなよ」という言葉は使わない。母は、そのような言葉を使って、私をリラックスさせようとしたのだ。しかし、無理して使った、あまりにもわざとらしい言葉に、私は、なお一層、参った。うれしかった。そして、母に、心から感謝していた。

しかし、家に帰ってから、その手紙のことは、何も話さなかった。というより、話せなかった。「ありがとう」の一言ではあるが、照れくさくて、とても言えなかったし、言ったら、なんとなく目に涙が浮かんできそうな気がした。母の前では、なぜか泣きたくなかったから……。

母は、あの時の手紙のことを今でも覚えているだろうか？私には、あの日以来ずっと机の中にしまっている。そして、何かの拍子に、ふっと思い出す。読みかえず。ぐっと、手応えを感じる。そこに「母」がいる。

そして、再び机の中になってしまう。次に、私に何かが起こり、また、思い出す時まで……。